科学探偵　～ASITOMO～　番外編　トリック

ユッキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

科学探偵　～ＡＳＩＴＯＭＯ～　番外編　トリック

【Ｎコード】

Ｎ７０４８Ｓ

【作者名】

ユッキー

【あらすじ】

科学探偵、難解トリックに挑戦！　仕組まれた罠とは！？

（前書き）

これは科学探偵の本編とは違います。

ある日。
僕はトリックと勝負する羽目になったのだ。まったく、最近は探偵の使い方が悪いよ。馬鹿でもわかるような事件を何個も解決しなきゃだめだから……。ただつまんなくて、疲れるだけだ。……というわけで、僕はやる気が落ちてた。……でも。
この事件は僕の心を熱くした。

――株式会社「トロイ」。
事件現場はここだ。いつも通り津ケ谷が説明をした。
「殺されたのは、社長の天川拓平（あまのがわたくへい）です。死亡推定時刻は昨日夜９：００ごろ。おそらく屋上からの飛び降り自殺かと。屋上に上がる手段は、秘密階段だけで、そこに通じる通路のカギは、社長だけが持っていました。合鍵は無し。というわけで、他殺の可能性はないと判断していいでしょう」
「そうですね。父は最近会社の経営がすごく悪くなって、それでたまっていたストレスが半端ない大きさになっちゃったんじゃないんですか？」
殺された社長の息子、天川拓宏（あまのがわたくひろ）が口をはさむ。津ケ谷はうん、とうなずいた。
「そうなんです。拓平さんは会社が大幅な赤字を抱えたから、自殺という道を選んだ。皆さんもそう思いますよね？　いや、絶対そうだ。そうに違いない。……というわけで、この事件は自殺と断定して、操　作を続行しましょう」
「いよっ！　さすが刑事さん。事件をぱぱっと解決してしまいました。お見事！！」
津ケ谷が自信たっぷりに言い、拓宏があまりにもそれを大げさにまくしたてるので、ほかの社員たちも「いやー、さすが刑事さんです

なあ」「最高だ」などと口々に叫ぶ。それを聞いた津ケ谷は顔を赤らめて照れている。僕はそれを呆れ顔で見ていた。まったく、大の大人がはしたなさすぎる……。

僕も、確かに津ケ谷の意見には賛成だった。津ケ谷も成長した。まあ、人間は日に日に進歩していくのがあたりまえだけどね。ただ……。

――社長が死んだというのに、なんだこの明るさは。

ふつう、みんな大切な人をなくして悲しんでいる……はずなのに、みんな泣くどころか、逆に津ケ谷を見て笑っているではないか。これはどう考えてもおかしい。事件は推理できても、その推理がおかしかったら意味がないのだ。推理や捜査は、速さより正確さがものをいう。僕は、念には念を入れるという意味で尋ねてみた。

「あの……ちょっといいですか。僕も津ケ谷さんの推理には賛成です。でも世の中には完全犯罪というものがあります。会社の社長が殺されるなんて大事ですよね？　だとしたら完全犯罪の可能性も否定できません。……さっき津ケ谷さんが屋上に上がるには秘密の通路を通るしかないといっていましたよね？　だったら社長も通路を通ったはずです。その通路を調べてみましょう。社長が通った跡があったら、それこそが決定的な証拠になるのだと、僕は思うのですが」

「トロイ」の社員たちは僕の提案にさほど乗り気ではなかったが、津ケ谷が「岸山君の言っていることも一理あります」と、フォローしてくれたので、調査は決行されることになった。ナイス、津ケ谷！

操作は優秀な捜査官が、通路をくまなく捜索した。社員たちはそれを興味深そうに見ている。津ケ谷はわざとらしく額の汗をぬぐった。

捜査官たちは慣れた手つきでデータを処理していく。てきぱきとしていて、見ていて気持ちがいい。あっ、終わったようだ。

ここにいるみんなは全員、社長が通路を通った跡がある、と思っているに違いない。正直、僕もそう思っていた。これで自殺と断定

されて、事件は解決された……はずなのに、なぜか捜査官たちは暗い顔をして戻ってきた。いやな予感がする。
「どうでした？　捜査結果は」
「それが……その……通路はくまなく調べましたが、社長が通った後は検出されませんでした」
「何が！？」「検出されなかっただと？」「でたらめ言うな！」「ウソだーー！」などと社員たちは口々に叫ぶが、津ケ谷は冷静だった。
「犯人が、社長のカギを奪って社長を殺し、そのあとでカギを社長のところに戻したとか？」
「いや、その可能性も考えて調べてみたんですが、社長の指紋しか検出されませんでした」
うーん、謎は迷宮入りしていく。自殺、という可能性は消えた。これこそが犯人が仕組んだトリックなのか？　……落ち着け。ここは落ち着くことが最優先だ。状況を整理しながら、事件を解決に導くのだ。……ん？　おかしい？　会社にあるまじきものがある……？
「質問しますが、＜トロイ＞は、どんなものを生産しているんですか？」
「その質問は事件に関係ないと思いますが？」
拓宏が反論する。僕は軽くスルーした。
「まあ、そうだとは思いますが……。ちょっとこの際知りたいことがあって……」
「……そうですか。ではお答えしましょう。　スーパーコンピューターの遠隔補助操作や更新プログラムのアップロード、それにウイルス対策ソフトの送付ですので、生産業とは違いますね。仕事に必要なのは、コンピューターだけです」
なるほど。事件が解決に近づいたかも！　質問を続ける。
「ほう。ではなぜ、そのような会社にクレーン車があるのですか？」
僕は指差した。みんなの視線がそれに連れられていく。車庫があっ

た。
「あれは、会社の解体工事用です！」
必死に反論する拓宏。だが、拓宏のスーツのポケットから、決定的な証拠がこぼれ落ちた。
「……ほう。クレーン運転免許証、天川拓宏ですか……」
「いやっ！　ちがっ、違います！　これは趣味でトラックを……」
「ほほう。さっきは会社の解体とか言っていたのに、今度は趣味ですか。言ってることが矛盾していま　すね」
「……！！」
「社長の死体には、手足をロープで縛られた跡がありますよ。あのクレーンにもロープがひっかけてあります。おかしいですよ？」
拓宏の顔が真っ青になった。つられてほかの社員たちの顔も真っ青になる。
「つまり、あなたたちは社長の手足を縛り、クレーンからつり落として殺した。自殺に見せかけようとしたんですね。そうすると、これは計画的犯行だ。あなたたちは前々からみんなで話し合っていたんでしょう？　社長に恨みでもあったのかもしれないけど。……素晴らしくトリックが仕組まれた犯罪でした。このままだったら自殺のまま事が運ばれていたでしょうね」
久しぶりだ。こんなに長くしゃべったのは。水がほしくなった。でもつづけた。
「ただ、なぜ僕がその＜トリック＞に気づいたかというと、人間の心理です。あなたたちは悲しがらなければいけない時に、嬉しがってしまった。顔には出なくても、体の動きや口調でわかっちゃうんです。　事件にはトリックが仕組まれていたけれど、心にまではトリックが仕組まれていなかった。そこです。人間って難しいですね」
こうして、この事件は解決された。

（後書き）

どうでした？　感想、評価をお待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7048s/

科学探偵　～ASITOMO～　番外編　トリック

2011年10月8日21時32分発行